



東京都・江東区立香取小学校、小平市立小平第五小学校における授業より

# 「心のワクチン」運動 コロナ禍の子どものホンネ

作文コンクールには、コロナ禍と向き合う子どもたちの声が多く寄せられましたが、「心のワクチン」運動の一環として実施中の、道徳と学級活動のモデル授業でも、この2年でがらりと変わってしまった生活について、様々な意見を聞くことができました。ここでは、子どもたちがどんな気持ちでコロナ禍に向き合っているのかをご紹介します。子どもたちの本音は、大人の心を動かすものでした。

## わたしたちだってつらかった

人前ではマスク着用、給食は黙って正面を向いて食べる、友達と大きな声で話さない、なるべく出歩かない、親のリモートワーク中は家でも静かに……。コロナ禍で変わったことや困ったことを挙げてもらおうと、出てくる出てくる、たくさんの不満。日常生活で子どもたちが窮屈な思いをしている様子が見て取れます。

また「マスクで相手の表情がよくわからなくなった」「友達と遊びづらくなった」といった声からは、他者とのコミュニケーションが取りづらくなったことに、もやもやしている気持ちが伝わってきました。

子どもは発散できる場所や手段が少ない分、大人以上につらい思いをしていたのかもしれない。



馬場講師が子どもたちの意見を引き出します

## 「新しい生活様式」を続ける意味

子どもたちを困らせる、感染拡大防止のために行わなくてはいけないこと、いわゆる「新しい生活様式」について、彼らは驚くほど細かくその内容を把握し、実践していますが、やはり本音では「つまらない」「変な感じ」「嫌だな」と思っています。

とはいえ、嫌だからとやめてしまったら、感染者は増えて収束のめどがつかず、前の生活に戻れないということも、きちんとわかっていました。

「新しい生活様式」を続けていくのは、そうしないと怒られるからではなく、なによりまずは自分が感染しないため、経済が混乱して仕事をなくす人がないように、今は行き来が難しい他の国の人も関わられるようになど、しっかりと意味を考えてのこと。中には、「これをする事でみんなが協力し合うから、人と人との絆も深まると思う」と意見を出してくれた子も。

\*\*\*

大変な状況下でも、他者のことを考えられる子どもたちが本当に多かったことに感心するとともに、彼らをこれ以上悲しませることがないように、大人として襟を正していかななくては、と考えさせられました。

## 「コロナ禍の親切」を考える 教育プログラムを公開中



活用した教育プログラムは、監修に馬場喜久雄氏（全国小学校道徳教育研究会 顧問）を迎え、（一社）感染症対策コミュニケーションラボと共同制作したもの。教材は、第45回「小さな親切」作文コンクール・文部科学大臣賞受賞作品で、赤ちゃん連れのお母さんが落としたおもちゃを“わたし”が拾う場面から始まります。お母さんの反応や“わたし”の気持ちを通して、コロナ禍での親切や人とのかわり方について考えてもらいます。

親切運動Webサイトでは、学習指導案や教材などを詳しくご紹介。上記学校でのモデル授業レポートも随時公開していきますので、ぜひ、併せてご覧ください。